

# 田端人

芥川龍之介

青空文庫



この度は田端の人々を書かん。こは必ずしも交友ならず。寧ろ僕の師友なりと言ふべし。  
 下島勲 下島先生はお医者なり。僕の一家は常に先生の御厄介になる。又空谷山人と号し、乞食俳人井月の句を集めたる井月句集の編者なり。僕とは親子ほど違ふ年なれども、老来トルストイでも何でも読み、論戦に勇なるは敬服すべし。僕の書画を愛する心は先生に負ふ所少からず。なほ次手に吹聴すれば、先生は時々夢の中に化けものなどに追ひかけられても、逃げたことは一度もなきよし。先生の胆、恐らくは駝鳥の卵よりも大ならん乎。

香取秀真 香取先生は通称「お隣の先生」なり。先生の鑄金家にして、根岸派の歌よみたることは断る必要もあらざるべし。僕は先生と隣り住みたる為、形の美しさを学びたり。勿論学んで悉したりとは言はず。且又先生に学ぶ所はまだ沢山あるやうなれば、何ごとも僕に盗めるだけは盗み置かん心がまへなり。その為にも「お隣の先生」の御寿命のいや長に長からんことを祈り奉る。香取先生にも何かと御厄介になること多し。時には叔父を一人持ちたる気になり、甘つたれることもなきにあらず。

小杉未醒 これも勿論年長者なり。本職の油画や南画以外にも詩を作り、句を作り、歌

を作る。呆あきれはてたる器用人と言ふべし。和漢の武芸に興味を持つたり、テニスや野球をやつたりする所は豪傑肌がうけつはだのやうなれども、荒木又右衛門あらかまたゑもんや何かのやうに精悍せいかん一点張りの野蛮人にはあらず。僕などは何か災難さいなんに出合ひ、誰かに同情して貰ひたき時には、まづ未醒老人に綿々と愚痴ぐちを述べるつもりなり。尤も實際述べたことは幸ひにもまだ一度もなし。

鹿島龍蔵かしまりゆうざう

これも親子ほど年の違ふ実業家なり。少年西洋に在りし為、三味線しやみせんや

御神燈ごしんとうを見ても遊蕩いうたうを想はず、その代りに艶なまめきたるランプ・シエドなどを見れば、

忽ち遊蕩を想ふよし。書、篆刻てんこく、謡舞うたひまひ、長唄ながうた、常盤津ときはず、歌沢うたぎは、狂言、テニス、氷こほり

江すべり等通ぜざるものなしと言ふに至つては、誰か啞然あぜんとして驚かざらんや。然れども鹿

島さんの多芸なるは僕の尊敬するところにあらず。僕の尊敬する所は鹿島さんの「人とな

り」なり。鹿島さんの如く、熟して敗やぶれざる底ていの東京人は今日こんにち既に見るべからず。明みやう

日にちは更に稀まれなるべし。僕は東京と田舎みなかとを兼ねたる文明的混血児なれども、東京人たる

鹿島さんには聖賢相親しむの情——或は狐狸相親しむの情を懷くわい抱ほうせざる能あたはざるもの

なり。鹿島さんの再び西洋に遊ばんとするに当り、活字を以て一言いちげんを餞はなむけす。あんまりラ

ンプ・シエドなどに感心して来てはいけません。

室生犀星 むろふさいせい これは何度も書いたことあれば、今更言を加へずともよし。只僕を僕とも

思はずして、「ほら、芥川龍之介、もう好い加減に猿股ざるまたをはきかへなさい」とか、「そのステッキはよしなさい」とか、入らざる世話を焼く男は余り外ほかにはあらざらん乎か。但し僕をその小言こことの前に降参するものと思ふべからず。僕には室生むろふの苦手にがてなる議論を吹つけ

る妙計めうけいあり。

久保田万太郎 くぼたまんたろう これも多言たげんを加ふるを待たず。やはり僕が議論を吹っかければ、忽ち敬

して遠ざくる所は室生と同工異曲なり。なほ次手に吹ふい聴いすれば、久保田君は未だに呼び捨てに出来ず。)

れども、(室生を呼ぶ時は呼び捨てにすれども、久保田君は未だに呼び捨てに出来ず。)

海鼠腸このわたを食はず。

からすみを食はず、況いはんや烏賊いかの黒くろ作りづく(これは僕も四五日前ぜんに始めて

食ひしものなれども)を食はず。酒客たらざる僕よりも味覚の進歩せざるは気の毒なり。

北原大輔 きたはらだいすけ これは僕よりも二三歳の年長者なれども、如何いかにも小面こづらの憎い人物なり。

幸さいはひにも僕と同業ならず。若し僕と同業ならん乎か、僕はこの人の模倣もぼうばかりするか、或はこ

の人を殺したくなるべし。本職は美術学校出の画家なれども、なほ僕の苦手にがてたるを失はず。

只僕は捉とらへ次第、北原君の蔵家庭ざうかていを盗み得るに反し、北原君は僕より盗むものなれば、

畢ひつきやうとく 竟得をするは僕なるが如し。

これだけは聊いささか快とするに足る。なほ又次手ついでにつけ加

へれば、北原君は底抜けの酒客なれども、座さへ酔うて崩したるを見ず。纔に平生の北原君よりも手軽に正体を露すだけなり。かかる時の北原君の眼はその俊爽の色あること、画中の人も及ばざるが如し。北原君の作品は後代恐らくは論ずるものあらん。然れども眼は必ずしも論ずるものありと言ふべからず、即ち北原君の小面憎さを説いて酔眼に至る所以なり。

(大正十四年二月)

# 青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

田端人  
芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>